

## インドネシア、マレーシア、そしてシンガポール

伊藤眞

最近、シンガポールを訪れることが多い。シンガポールにおける高齢者の組織化に関する調査のためである。急速に高齢化が進むシンガポールにも日本の老人クラブに類似した組織はあるが、むしろ盛んなのは、宗教団体、NGO が支援する高齢者対象のケア施設である。通常、それらの施設は、曜日ごとに、ゲーム、ダンス教室、カラオケ、初級英会話教室、ビデオ鑑賞といったメニューをそろえ、メニューごとに会費を徴収することが多い。午後にはお茶や軽食も提供する。シンガポールでは、「どんな活動でも会費を支払わなければならない、そうしないと参加者が多すぎて困るから」とあるボランティアはいう。

あるとき、ボランティア団体に伴って、身体に障害をもつ高齢者の集まるケア施設を訪れたことがある。そこでは、車椅子でやってきた高齢者に対して、ボランティアが合唱を指導したり、ボールの手渡しゲームをした。車椅子の高齢者に同伴していたのは、まだ若いインドネシアもしくはフィリピンからの女子労働者で、まとまった数のインドネシア人家事労働者に出会ったのはその機会が最初であった。以後、それがきっかけとなって、彼女ら女子労働者についても調査することになった。

かつてマレーシア・サバ州でインドネシアからの労働者について調査したことがある。サバ州の場合、インドネシアからの労働者はスラウェシもしくはインドネシア東部の出身者が多く、なかでも南スラウェシ出身のブギス人がそのマジョリティを占めていた。それら労働者の大半は男性で、プランテーション、工場などで働いていた。市場の小商人や食堂の従業員の中にはインドネシア人女性がいないことはないが、数量的には男性が圧倒的多数を占めるという印象があった。これに対して、シンガポールの場合、インドネシアからの労働者と言えば、まず女性家事労働者であり、聞いた限りでは、出身地もジャワ、なかでも中部ジャワ出身者が多い。建設現場はもちろん男性労働者の世界であるが、そこにはインドネシア人男性はおらず、バングラディッシュ出身者が大多数を占めている。

今回の調査でインドネシア人家事労働者について、認識を新たにすることがある。一般に、フィリピン人家事労働者と比較して、インドネシア人家事労働者は、従順でおとなしく、英語力

も乏しいため雇用側との交渉能力もない、などと指摘されてきた。また、時折伝えられる雇用者側による虐待報道を通じて、被害者としての家事労働者という側面のみが強調され、増幅される傾向があった。こうしたインドネシア人家事労働者像は、全体的に見れば、必ずしも誤りとはいえず、社会的弱者であることは事実であろう。しかし、その一方で、彼女らインドネシア人家事労働者が単に受け身的な存在にとどまることなく、シンガポールに生活の場を得るという機会を利用して、積極的な生き方を選択する者がふえつつあるのではないかという点である。普段は雇用者の住宅内に住み込みで働いている彼女らは直接会う機会もないが、今やハンドフォンで頻繁に交信し合う、たまの休日には単に会ってフードコートで食事するだけでなく、高卒資格認定試験のための勉強をしたり、インドネシア大使館で日曜日に開催される技能講習会などに参加する。あるいは、ネズミ講まがいのビジネスを副業とする者もいる。さらには、家事労働で得た収入で Batam 島に小さな家屋を購入し、賃貸収入を得ながら家事労働を継続している者さえいる。もちろん、日曜日の「課外活動」が可能なのは、休日を許す雇用者——それはシンガポリアンというよりも、欧米・日本などの外国人雇用者に多いといわれる——に恵まれた場合である。しかし、最近結成された「インドネシア・ファミリー・ネットワーク」(会員約 50 名程度)に見られるように、インドネシア家事労働者間のネットワーク化を進め、現地の NGO の協力・支援を得て、休日の定例化を政府に訴えるという動きもある。おそらく、ジャワの片田舎で暮らし続けたならば到底考えられなかった人と人の結びつきを彼女らは経験しているのであり、それを通して、彼女らインドネシア人家事労働者は、あらたに自己主張する主体として変貌しつつあるのではないだろうか。

従来、シンガポールは、マレーシア研究、東南アジア島嶼部研究において、いつも例外的な扱いを受けてきた。また東南アジアを対象とする文化人類学研究者から特別な関心をもたれることも稀であった。しかし、グローバル化が進行する現在、シンガポールは、東南アジア研究、マレー研究というコンテキストにおいても、研究対象としてあらたな役割を獲得しつつあるように見える。なぜなら、そこには、たとえば記号化する「民族」のあり方のように、我々が今後取り組むべき現代的課題が兆候的に見出されるように思えるからである。ただ、頭が痛いのは、シンガポールでの調査には滞在費が非常に嵩む点なのだが。